

仏伝（釈迦の伝記物語）の日本的変遷：高知県いざなぎ流祭文

著者	小松 和彦
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	アジア新時代の南アジアにおける日本像：インド・SAARC 諸国における日本研究の現状と必要性，ジャワハルラル・ネルー大学，2009年11月3日-4日
ページ	57-64
発行年	2011-03-25
その他の言語のタイトル	The Transformation of the Biographical Story of the Shakamuni-Buddha: A Case of Mythological Stories of the Izanagi-sect of Kochi Prefecture
シリーズ	インド・シンポジウム 2009 International Symposium in India 2009
図書名	アジア新時代の南アジアにおける日本像：インド・SAARC諸国における日本研究の現状と必要性
URL	http://doi.org/10.15055/00001229

仏伝（釈迦の伝記物語）の日本の変遷

——高知県いざなぎ流祭文

小松和彦

国際日本文化研究センター

1. 「いざなぎ流」と称する民間信仰

高知県の北東部の山間地帯に、「いざなぎ流」と称する民間信仰が、地元に住む宗教者たち（普段は農業や林業に従事）によって伝承されている。彼らはその土地に住む人々から「太夫^{たゆう}」と呼ばれており、村の神社の祭りや家々の祭り、病気直しの儀礼などさまざまな活動を行なっている。

太夫たちは、祭儀を行なうときに、祭祀の対象となる神々や自分たちが崇拝する神々に関するたくさんの物語を読み唱える。その内容を見ると、神話や伝説と表現し直すことができるものである。これを彼らは「祭文^{さいもん}」と称している。

そのなかの一つに、「すそ（呪詛）の祭文」と称する祭文がある。この祭文は、「とうどじょもん」（唐土呪文、唐土浄文）という宗教者（太夫たちの師匠の先祖の一人と信じられている）が、呪いをかけたり、その呪いを解除したりすることを描いたもので、太夫たちの間では、呪いに関する大切な祭文であるとされている。すなわち、呪いに起因するさまざまな良くないことを解除するための儀礼の際には、必ず読み唱えなければならない、とされているのである。

この興味深い物語は、どのようにして成立したのだろうか。これを釈迦の伝記つまり「仏伝」（仏伝文学）と比べてみると、明らかに仏伝をもとにしながら呪いの物語に仕立て直したものであることがわかる。つまり、仏伝は、この地に伝わったときに、仏伝としての性格を大幅に弱め、呪いの技法とその伝承者の物語に変貌してしまったのである。したがって、太夫たちは、この「すその祭文」が釈迦の伝記であることをまったく知らず、むしろ自分たちの先祖の師匠の一人の物語、それも呪いの技法に関する始まりの物語として理解しているのである。

以下では、この祭文を紹介し、これが釈迦の伝記の変形の物語であることを確認したいと思う。

2. 日本で流布した仏伝文学——「釈迦の本地」の梗概——

まず、日本に伝わった「仏伝」とその大衆への流布について簡単に見ておこう。仏伝はす

でにインドで語られ、インドの周辺国や中国、韓国などでも語られていた。日本では平安時代初期の『東大寺諷誦文稿』の「仏伝説話」が初出と考えられている。

「仏伝」は『今昔物語集』や『私聚百因縁集』などの説話集において最初の巻に収載されているように、仏教を信じる人びとにとって重要な意味を持っていた。そのいっぽう、日本では釈迦の伝記を絵画化したいいわゆる「仏伝絵」も大いに制作された。その典型は釈迦が亡くなったときに様子を描いた「涅槃図」である。「仏伝絵」は絵巻の他にも、掛け軸や壁画、冊子本などさまざまな形式を利用して描かれ、広められていった。

「釈迦の本地」は、「仏伝文学」に素材を求めたもので、中世に多数製作された短編の小説（その多くは絵入り）つまりお伽草子系の物語の一つである。

この「釈迦の本地」が興味深いのは、その読者の中心が、読み書きがある程度できる都市の民衆であったことである。おそらく、いざなぎ流太夫の先祖が手にした仏伝文学作品もまた、こうした「釈迦の本地」のたぐいであったのではなかろうか。以下に、その梗概を紹介する。

天竺のかびら城のじょうぼん王には、王子がいなかった。どうしたら子を得ることができるかと占い、摩耶夫人を迎えた。摩耶夫人は睡眠中に受胎し、子（悉多太子）が生まれた（托胎）。釈迦が摩耶夫人のもとに白象に乗ってやってきて、右の腹から胎内に入ったのである。

王子誕生の七日後に、母の摩耶夫人は亡くなり、叔母に育てられる。

七歳の時、小鳥が雛を育てているのを見て、自分には母のないことを知り、仏道に入って母の菩提を弔おう、と決意する。父王はこれを察して、五百人の占い師（人相占い）を招いて太子の将来を占わせると、四百九十九人は王になるだろう、と判じたが、一人だけ出家して衆生を救う、と占った。王は、太子を慰めようと、四方に四季の庭を作るが、太子がこの庭で遊んでいるとき、一人の老人に会う。その老人が季節の変化とともに、病人、死人、白骨に変わってゆき、そして僧侶と会って、人の世の無常を感じ、父王に出家の思いを告げる（四門出遊）。

王はさらに慰めようと、安の大臣の娘で美人の誉れ高い姫やしゅだら女を妃に迎えようと考えたが、安の大臣は、弓矢で鉄的を七枚射通したものに姫を与える、との条件をつけた。たくさんの者が挑戦したが叶わず、じょうぼん王の甥の提婆達多も挑戦して、五枚射通した。太子は七枚全部射通したので、やしゅだら女と結婚した（競技武芸、結婚）。しかし、太子はなおも菩提心が強く、妃は悲しんだ。王が、太子に子ができたら出家を許す、と言うと、太子は妃の腹を指さして懐妊させる。十九歳のとき、太子は城を出て、檀特山に向かう（出家）。

山の麓であらから仙人に会い、出家し、仙人の指示のもとで十二年間修行を積み、法華経を授けられる。また、まかだ国かや山のふもとで法を説け、と指示される。三十歳のときに、釈迦牟尼仏となる。

そこに外道（魔王）たちが押し寄せてきて、修行を妨害する（降魔成道）。仏とな

ったのち、須達長者と出会い、長者は仏のために祇園精舎を建立する。仏は八十歳のときに、眉間より光を発し、涅槃が近づいたことを弟子たちに告げ、夜中に涅槃した（涅槃）。

この「釈迦の本地」の大筋は、漢訳仏典の仏伝にそったものである。敦煌の壁画に見られる「仏伝」とも大筋において同じである。その意味では、「釈迦の本地」は中国の「仏伝」の日本語版と言ってもいいだろう。

日本人の読者の多くは、題名に「本地」とあることから、釈迦が釈迦になるまでの物語が語られていることを理解し、当然のことながら、この話の舞台が「天竺」であることも理解する。

それでは、どこが天竺らしいのだろうか。そう問い直してみると、意外なほど天竺らしい記述がない。「かびら城」とはネパールのカピラヴァスツ、「じょうぼん王」はシュッドーダナ、その妃の「摩耶夫人」はマーヤー、釈迦の妃やしゅだら女はヤショードラー、提婆達多はデーヴァダッタのことである。また釈迦の俗名である悉多太子はシューダルタである。梵語の発音に、ある程度まで日本語としての意味をも配慮しながら漢字やひらがなを当てたものなのである。強いて天竺らしい箇所——異国らしきというべきかもしれないが——を挙げれば、「天竺のかびら城」とか「じょうぼん王」とか「摩耶夫人」「檀特山」といった、日本人らしからぬ人名や地名くらいではなかろうか。むしろ、その物語の内容は、すこぶる日本文化化されたものになっていて、登場人物や地名などを日本人名に変えれば、日本を舞台とした日本人の王子や貴族の子の発心出家譚の一つに変わってしまうといってもいいほどである。

いくつかの「仏伝絵」、たとえば「釈迦の本地絵巻」に描かれた釈迦の国の様子を見てみると、じょうぼん王に、占い師（相人）が生まれて来る子の未来を占う場面である（図1）。この場



図1 「釈迦の本地」（金刀比羅宮蔵）に描かれた占いの場面

面をなんの説明もなく見れば、中国の王宮の様子を描いたものではないかと思うに違いない。しかし、ここは「天竺」なのである。

しかしながら、日本風に変容していった部分もある。釈迦の物語でも最も重要な場面の一つである「四門出遊」の場面は、「釈迦の本地」の詞書では、父王が王宮の四門の外に四季の風景を作り、そこで四季の移ろいを見て、出家の心を起こす、というように変形されている。いうまでもなく、この「四方四季の庭」のモチーフは、御伽草子の「浦島太郎」の「竜宮」や「大江山酒吞童子」の「鬼が城」にも同様に見出されるもので、異界の特徴つまり日本人の理想郷（極楽浄土）を物語るものと考えられていた。すなわち、この「城門の外」から「四方四季の庭」へ変化したところに、日本の変容の跡が見出せるわけである。

あるいはまた、青年の釈迦（悉多太子）と提婆達多が腕比べをする「武芸競技」の場面もその一つである。ガンダーラのレリーフには、これに当たる、釈迦が象を城門の外に投げる場面が描かれている。

中国の仏伝では、釈迦と従兄弟の提婆達多が妃となる姫をめぐって武芸を競うこの場面を、次のように語っている。

弓矢の腕比べのため城門を出ようとするとき、大象が行く手を妨害したので提婆達多が象の頭を叩いて地に倒し、達多が足指でその象を投げ捨て、釈迦がその象を手で持ち上げて、城外に放り投げ、さらに城外に出てその象を受け止め、しかも象を蘇生させる。そののちに、七枚の的を一矢で射抜く、という話が続く。そのなかでも強調されているのは、象を持ち上げる部分であった。

明代に描かれた中国の仏伝絵に描かれた同じ場面では、釈迦が右腕で高々と象を持ち上げている。日本ではどのように描かれているのだろうか。「釈迦堂縁起」（室町時代）に描かれた仏伝を語る部分がある。上述の試練・競技の場面である。これは中国から伝来した仏伝絵に従ったらしく、象の場面も、弓の競技も描かれている。

ところが、「釈迦の本地」では、弓矢の勝負のみで、象をめぐる事件のことは脱落しているのである。図2は、「釈迦の本地」に描かれたその競技の場面である。すなわち、仏伝が



図2 「釈迦の本地」（金刀比羅宮蔵）に描かれた弓の競技の場面

日本に定着し世間に流通するにつれて、天竺（インド）の話でありながらも、象をめぐるエピソードなどの天竺（インド）的な要素が排除され、日本でもそのまま通用する弓矢の競技の方が強調されていったのである。

3. いざなぎ流「すその祭文」の梗概

上述の「釈迦の本地」の内容は、釈迦の伝記の翻案である。これによって釈迦の生涯がわかる。伝えたい基本的メッセージは、インドのそれと変わりはないであろう。

ところが、いざなぎ流「すその祭文」では、まったくといっていいほど異なる物語に変わってしまっているのである。

「すその祭文」は、伝承者によって内容が若干異なるが、ここでは、門脇豊重という太夫が所持してきた『呪咀祭文釈尊流』^{すそさいもんしゃくそんりゅう}に基づいて、その梗概を以下に紹介する。

それは、次のように語り始まる。

申せば恐れ也 申さねばもらひ也 地にてかすみも掛らん 天にてくもりもわしまさん
天神七代地神五代の御代が出来初り申た 夫れより其の後に釈迦羅仏の御代が出来初り参らした 其の後に釈迦釈尊殿の御代が出来初り参らした其の御時 釈尊殿の妻のきさきに……（下略）。

ここで注目したいのは、この祭文が、物語を「釈迦羅仏」の「御代」を継いだ「釈迦釈尊殿」の代の話として語り出されていることである。明らかに、これは釈迦の物語を意識した作られた方をしている。しかしながら、物語の冒頭では、この釈迦釈尊殿の御代すなわち「国」（領地）が、日本なのか、唐なのか、はたまた天竺なのかは、はっきりとは語られていない。したがって、仏伝に明るい者ならば、この物語の舞台は天竺かもしれないと想像するだろうし（私も最初そう思った一人である）、仏伝に詳しくない者ならば遠い昔にあった日本のどこかの国のことだと想像するだろう。ところが、物語が進むにつれて、物語は釈迦釈尊殿の「御代」（領地）を日本にある国として語っていることが明らかになってくる。つまり、仏伝であることを規定していた「天竺」という舞台の枠組みが、ここでは消滅してしまっているのである。

物語の発端は、この「釈迦釈尊殿」の妻（后）が、「火難水難四百四病八百八病」^{かなんすいなんしひやくしびようはっぴやくやびよう}の病にかかったことにある。

そこで、釈尊殿が妻の病を治すために、神仏に病の回復を願うさいの供物にする、七十五品の珍品を揃えて持ってきた者に御代を渡す、との触れを出す。これを聞いた「オジ」の「だいばの王殿」が、七十五品の珍品を揃えてやってきて、釈迦釈尊殿に、約束なので「御代」を渡せ、と迫る。ここでいう「オジ」とは、釈迦釈尊殿の叔父ということではなく、「御代」や「家」を相続できなかった者すなわち「相続者・釈迦釈尊殿の弟」という意味として理解しておいたほうが無難のようである。釈迦釈尊殿の弟であるこの「だいばの王殿」の名前が、仏伝にいう「提婆達多」に由来する語であることは、容易に想像できるだろう。

約束にしたがって、御代がだいば王に渡されることになった。しかし、このとき、「下々百姓」^{げけひやくしやう}（家臣・領民ということであろうか？）がだいば王に、もし釈尊殿の后が亡くなったり、后の病が癒えても妃に子が生まれなかったならば、そのまま御代はだいば王のものとしてよいが、後に男子が生まれたならば、その子が七歳になったときには御代はその子に戻すように、と提案をする。だいば王は、これを受け入れて「御代」を譲り受けた。

やがて、病が癒えた釈尊の后が男子を生む。名を「釈迦王」という。釈迦王が七歳になったとき、下々百姓は、だいば王に、約束通り、釈迦王の御代を譲り渡すように迫る。

だいば王は、約束とはいえ、七十五品の珍品と引き替えに得た御代を易々と渡したくなかったので、弓矢の勝負をして勝った者が御代を受け取ることにしたい、との提案をする。こうして、釈迦王とだいば王との御代を賭けた弓矢の勝負が行なわれることになった。このとき用意された的は、石の的が七枚、黒金の的が七枚、皿歯の鉄の的が七枚の合計二十一枚であった。釈迦王はこの七枚重ねの的をそれぞれ見事に射抜くが、だいば王は石の的は射抜いたが、黒金の的は矢を弾き返してしまう。御代は釈迦王に譲られ、だいば王は鬚を切って行脚修行の旅に立った。ここまでが前半の物語である。

さて、右の弓矢の勝負の場面は、明らかに「釈迦の本地」にみえる、釈迦（太子）と従兄弟のだいば達多との間で行なわれた弓矢の勝負の場面の基づいている。「釈迦の本地」では、弓矢の勝負は、「やしゅだら女」という天下一の美女をめぐつてのものであった。安の大臣が七つの的をすべて射抜いた者に自分の娘をやると言ったので、釈迦と提婆達多が弓矢の勝負をし、提婆達多が七つの的のうち五つしか射抜けなかったのに対して、釈迦は七つの的すべてを射抜いたので、やしゅだら女を妻にする。ところが、「呪詛の祭文」では、妻に代わって御代に、的は七枚から三倍になりしかも七枚重ねを射抜くというふうに誇張され、「イトコ弟同士」から「オジとオイの関係」に変わっている。

このように、いざなぎ流「呪詛の祭文」は、「釈迦の本地」を参照し変形して作り出されたものと考えられるのであるが、忘れてはならないのは、「呪詛の祭文」は釈迦の伝記を語るための祭文ではなく、「呪詛」の起源、呪詛のかけ方や呪詛の鎮め方について語った物語である、ということである。呪いの物語を作るために「釈迦の本地」の一部が利用されたのである。

物語の後半は、そのことを描き出す。簡単に紹介しよう。

だいば王が行脚修行に出てしまったため困り果てただいば王の妻が、「このようになったのもすべて釈迦王のためだ、この怨みをなんとか晴らしたい」と思い、呪詛の術が得意な「当土浄文」（別の伝本では、唐土呪文、呪文博士などとも表現されている）に依頼して、釈迦王を「因縁調伏」（呪詛）してもらおう。その呪詛が効いて釈迦王が重病になるが、釈迦王が当土浄文に頼んで、「呪詛の一掃返し」をしてもらおう。このため、だいば王の妻が返ってきた呪詛のために重病になり、また当土浄文に「呪詛の一掃返し」を依頼するが、当土浄文は呪詛の掛け合いに終止符を打つため、今度は「呪

詛の祝い直し」（呪詛の鎮め）をする。こうして、昔から今に至るまで、当土浄文が行なったように、呪詛があればそれを「とろくが島のひおんの御社」に「南無呪詛神」として祝い送り鎮めるのである。

余談になるが、ここでの釈迦王は、御代を継ぐ「王」であって、やがて出家する宗教者ではない。しかしながら、唐突に、だいは王の妻の呪詛（当土浄文が代わりに行なった呪詛）で重病になったとき、その病氣回復を願って、釈迦王の八万三人の弟子たちが祈念祈祷をした、と語られている。

また、当土浄文という呪詛の扱いを得意とする宗教者の存在を教えるのも、八谷の山の住む釈迦の弟子の一人「こうてい（黄帝）菩薩」であった。これも、この祭文の作者が、「釈迦の本地」などの仏伝を利用してこの物語を作ったことと関係があるのだろう。釈迦にはたくさん弟子がおり、その釈迦を意識して造形された釈迦王にも弟子があっても不思議はないと思ったのではなかろうか。釈迦王には、仏伝の釈迦の面影が留められていたのである。

それにしても、上述の考察から明らかなように、天竺の釈迦の聖なる伝記もしくはそのエピソードも、いざなぎ流信仰のなかに取り込まれる過程で、ずいぶんと変容を遂げてしまったものである。

以上の物語は、いざなぎ流「すその祭文」のなかの「釈尊流」と称するものであるが、これとは別に、「すその祭文・だいは流」というものもある。「だいは」を「大婆」と記すテキストが多いが、おそらくは、これも「提婆達多」の「提婆」に由来する名称のようである。

この祭文は短い祭文で、「釈尊流」の後日譚的な内容になっている。

天竺での争いに負けただいは王は、大いに立腹し、東にも西にも黒雲を立てて、この世を闇にし、日本の人間衆生や牛馬畜類に至るまで仇敵として、その命を奪おうとした。これを知った日月二体の將軍様（日の神・月の神）が、弓祈禱をしたところ、だいは王が人へ乗り移って言う。「私のための神社を作り、神として祀ってくれるならば、鎮まろう」。そこで、社（すその社）を作って祀ったという。

この話の「だいは」は、たんに提婆王という名を借りているだけで、仏伝からの借用はないと言えそうである。

以上の事例は、インドと日本の間における文化伝播の一つの例として、興味深いものがあるのではなかろうか。

参考文献

- 黒部通善『日本の仏伝文学の研究』和泉書院、1989
 小松和彦『憑霊信仰論』講談社学術文庫、1994
 小松和彦「天竺観の変容」『日本人の異界観』（小松和彦編）せりか書房、2006
 林 雅彦「熊野古道伊勢路の『涅槃図』 玖への架橋」『熊野古道伊勢路の風景』東紀州観光まちづくり公社、2009

Komatsu, Kazuhiko, "The Image of India in the Popular Literature of Japanese Medieval Period." *East Asian Literatures: An Interface with India*, ed. P. A. George, Northern Book Centre, 2006